学位論文の内容の要旨

学位論文題目

医師業務のタスクシフト・シェアにおける薬剤師の取り組みとその効果

指導教員　　松田 佳和 ㊞
学位申請者　　佐藤 将嗣

医師業務のタスクシフト・シェアにおける薬剤師の取り組みとその効果

緒言

近年、医療の高度化と複雑化が進む中で、医師の業務負担の増大が課題となっており、その負担軽減を目的とした効果的なタスクシフト・シェアの導入が求められている。特に、本邦における炎症性腸疾患(Inflammatory Bowel Disease, 以下 IBD) 領域では、患者数の増加に伴い、効率的な医療体制の確立と安全な薬物療法の実践が急務となっている。薬剤師の処方代行入力やプロトコールに基づく薬物治療管理(Protocol-Based Pharmacotherapy Management, 以下 PBPM)は、医師業務のタスクシフト・シェアの一環として有効な手段であり、特に PBPM は、薬剤師と医師がタスクを共有・分担することで、処方業務の効率化と医療の質の向上を実現する方法として期待されている。しかし、薬剤師の取り組みが医師業務のタスクシフト・シェアに与える影響についての検討は十分に行われておらず、その効果や課題は明確になっていない。本研究では、薬剤師によるタスクシフト・シェアへの取り組みを評価し、その効果を明らかにすることを目的とする。さらに、得られた知見を基に、薬剤師によるタスクシフト・シェアのさらなる発展に向けた検討を行う。

第 1 章：医療チームへの薬剤師参加が薬剤師による処方管理に与える影響

第 1 章では、辻仲病院柏の葉において、IBD 領域で薬剤師がチーム医療に参画

することにより、薬剤師の処方代行入力やPBPMの適用といった処方への介入（以下、処方管理）に及ぼす影響について後ろ向きに検討した。その結果、薬剤師のチーム医療への参加は、薬剤師による処方代行入力を促進させ、特に回診へ参加することが重要であった。処方箋区分を内服・外用剤と注射剤に分けたとき、回診への定期的な参加は、内服・外用剤では、調整オッズ比（adj-OR）5.03[95%信頼区間(CI)：2.31 - 10.96, P < 0.001]、注射剤では、adj-OR 6.26(95%CI：3.5 - 12.01, P < 0.001)と有意な促進因子であった。本研究における処方代行入力にはPBPMによるものも含まれるため、PBPMの適用状況についても探索したところ、薬剤師がチーム医療に参画してもPBPMが促進されることはなかった。これによりPBPMの促進には、薬剤師がチーム医療に参画しているだけでは不十分である課題が浮き彫りとなった。

第2章：効果的なPBPMの作成プロセス

前章では、薬剤師がチーム医療に参画することで処方代行入力は促進されたが、一方でそれだけではPBPMは促進されないという新たな課題が明らかとなった。そこで、第2章ではPBPMの適用を促進するための作成プロセスに着目し、戦略的なPBPMの作成プロセスの有効性を評価するため、PBPMの適用状況を指標として検証を行った。本研究では、辻仲病院柏の葉において、過去に適用された処方代行入力の事例を基にPBPMの素案を作成し、それをIBDセンターの医師と協働して策定した。この取り組みの前後でPBPMの適用率がどのように変化したかを後ろ向きに検討した。その結果、PBPMの利用率は、取り組み前の1.0%から取り組み後の25.1%へと有意に増加した。このことから、本取り組みがPBPMの適用率向上に寄与し、その有効性が示唆された。さらに、本章の研究では、PBPMの適用が進んだことで処方の安全性が向上していることが明らかとなった。具体的には、疑義照会の発生率が取り組み前の3.1%から取り組み後の0.3%へと有意に減少し（P < 0.001)、疑義照会による処方変更も1.2%から0%へと減少していた（P = 0.013)。これらの結果から、PBPMが処方の安全性向上にも寄与していることが示唆された。

第 3 章：PBPM の限界と今後の展望

PBPM は、処方の安全性を向上させる可能性を示したものの、本研究では患者アウトカムとの直接的な関連性は明らかにされなかった。患者アウトカムに影響を与えるためには、PBPM の作成プロセスをさらに洗練させる必要がある。基礎薬学と臨床を統合するアカデミック・ディテーリングは、PBPM が患者アウトカムに与える影響を強化するのに役立つ可能性がある。このアプローチはまだ実証されていないため、臨床応用を探るためにはさらなる研究が必要である。

結論

本論文では、医師業務のタスクシフト・シェアにおける薬剤師のチーム医療への参加が果たす重要な役割を明らかにした。薬剤師のチームへの参画は処方代行入力を促進する要因となる一方で、PBPM の適用には十分な影響を及ぼさないことが示された。PBPM の適用を促進するためには、単にチーム医療に参加するだけでは不十分であり、別のアプローチが求められる。そこで、本論文では PBPM の作成プロセスに着目し、それによって戦略的に作成された PBPM がより適用される傾向にあることを確認した。また、PBPM は処方の安全性向上に寄与し、薬剤師によるタスクシフト・シェアが進むことで、処方の安全性を高める結果をもたらすことが示唆された。一方で、本研究では PBPM が患者アウトカムに与える直接的な影響については検討されていない。PBPM のさらなる発展には、作成プロセスのさらなる検討が求められるとともに、基礎薬学と臨床を統合するアカデミック・ディテーリングの導入が有効な手段となる可能性がある。今後、PBPM が患者アウトカムへ及ぼす影響を明確にするための研究が必要である。